全歴研第60回　研究大会(東京大会)参加記

鎌倉学園高校　**風間　洋**

2019年7月24・25日の両日、東京の中野サンプラザにおいて、全歴研東京大会が行われた。筆者は初日の第5分科会報告「これからの新しい歴史学習の提案」に参加したので、その内容と若干の所感を述べさせていただく。第一報告　田中駿一氏(都立南多摩中等教育学校)「多様な考えを引き出し、共有しあう日本史Aにおけるアクティブ・ラーニング型授業」では、学習意欲の低い生徒たちに歴史事象や史資料に対して自分の考えや感想を積極的にアウトプットさせる機会を設け、更にそれを生徒同士が共有することを通じて日本近代史の理解に繋げようとする実践報告である。問いは、歴史学習から現在の問題に繋がる課題(例「あなたの会社が環境汚染を起こしていたら、どうしますか？」等)に努め、生徒同士がこうした課題を意見交換する中で解決させているという。卒業後にすぐに就職する生徒たちが「他人の意見を知る大事さを知る」、これがこの授業の最大のメリットだという。歴史学習の成果を実社会で役立つ学びへ昇華させていく手法は、大変参考になった。

第二報告　相川　浩昭氏(都立荻窪高校)・池尻　良平(東京大学大学院)「生徒の問づくりを促す授業の開発と評価-定時制課程における世界史Aの実践を通じて-」は、生徒に教科書や授業の中でわからないことや疑問を抽出する作業を繰り返す授業実践に対する分析報告である。当初単純な歴史用語の知識に関する疑問ばかりが目立っていた生徒の問いが、次第に歴史的背景を踏まえた質の高い疑問に変化し、その数も増えてきたという。歴史学習において問いを持つことの大事さを意識させられたこと、疑問や問いをアウトプットすることで生徒自身がわからないことの自覚を促せたこと、教員や生徒同士とのやり取りの中で、学習上の信頼感や共有意識を持つことができたことなどが効果として挙げられた。90名近い生徒の問をすべて吸収し、それらにヒントや回答を付け、フィードバックする授業者の熱心さには頭が下がる。また、生徒に関心を持ちやすいテーマや素材選びの準備が、一層大事な比重を占めることを痛感させられた。

第三報告　海上　尚美氏「高校って何するところ？-博物館の教育支援機能を軸に考えてみる-」は、様々な複雑な問題を抱えた高校進学者に対して教員の力量の限界が叫ばれる昨今の実情の中、「博物館の教育支援機能」に活路を見出そうという、実践報告と提案である。学習指導要領などに博学連携が叫ばれて久しいが、相変わらず時間や費用、アクセスなどの問題でなかなか学校と博物館の連携は進んでいない。生徒を引率して陳列物を博物館の用意したワークシートを埋めさせる、という従来の活用から一歩進み、博物館のスタッフやアウトリーチなどのソフト面の活用を提案している。具体的には、民族衣装などの貸し出し用学習キット(国立民族学博物館)・教育支援専門スタッフ(東京都美術館)・教員の博物館研修(東京都歴史教育研究会)を紹介されていた。いずれも学校教育に新たな博物館活用を提案する事例であるが、まだ博物館側もこうした試みは一部でしか実践されていない。博物館も学校が何を必要としているか、まだ模索しているのである。教員も遠慮せず、博物館側に現在の学校の歴史教育で求められている内容を発信していくことの必要性を感じた。

以上3本の報告は、いずれも複雑な学習環境を抱える生徒に授業者が何とか生徒に「わかる」・「成功体験」を実感させてあげたいという熱意が伝わってくる内容であった。翻って自身の学校現場ではどうだろう？進学希望生徒が多く、総じて学習意欲は高いと思われるが、それはあくまでも「受験科目だから」という理由であり、自己の現在の課題と結び付けて歴史学習を行っているとは決して言えない。彼らもいずれ社会の様々な困難に直面するだろう。その時に歴史の学びが少しでも役立てる授業をしなければならないと、自身反省させられる大会報告であった。